

## 大都市圏中間地域の地域計画的展望

### — 三遠南信の広域構造 —

駒木伸比古（愛知大学）・村山 徹（名古屋経済大学）

#### 1. 目的

近年、教育・研究機関としての大学が地域に対してどのような役割を果たすかが注目されていることに異論はないであろう。その「役割」は様々であるが、例えば、「地域」に関連した書籍や論文の執筆、自治体の各種委員会における学識経験者としての参加、市民講座における地域学習講師としての講義、演習科目としての地域調査の実施、地域イベントへの参加などが挙げられる。本研究は、「『地域』に関連した書籍や論文の執筆」に焦点を当てることにする。

学問分野をベースとして「地域を」または「地域で」研究することが大学としての主要な役割である点に論をまたない。三遠南信地域に目を向ければ、現在に至るまで多くの研究がなされてきた。その背景には、理系・文系の大学や研究機関、シンクタンク、コンサルティング企業が立地していること、そして三遠南信地域が研究対象地域として魅力が高いことが挙げられる。ただし、過去・現在・未来の三遠南信地域を研究するにあたっては、「先行研究」の整理が必須である。すなわち、扱おうとするテーマについて過去に研究がなされてきたか、どのような問題・課題の提起がなされてきたか、その問題は解決されたかどうか、どのような解決案が提案されてきたか、そして問題解決の実現可能性はあるかどうか、などを検討しなければならない。そこで、本研究では、「三遠南信地域」という地域（空間、場所）で行われた研究を収集・整理し、その傾向の「可視化」を行うこととした。

#### 2. 方法

三遠南信地域に関しては様々な学問分野での研究蓄積があるが、本研究では地域を扱う学問の一つである「地理学」に焦点を当て、論文を収集し整理する。なお、「論文」は学術雑誌から紀要研究、報告書に至るまでさまざまな媒体に掲載されている。本研究では、外部査読システムを導入しており、かつ会員が比較的全国に分布している主要な地理学関係（主に人文地理

学分野）の学術雑誌を対象とした。表1に雑誌名および発行機関を示した。

表2 対象学術雑誌一覧

雑誌名	発行機関
地学雑誌	(公社) 東京地学協会
地理学評論	(公社) 日本地理学会
E-journal GEO	〃
季刊地理学 (旧: 東北地理)	東北地理学会
人文地理	(一社) 人文地理学会
新地理	日本地理教育学会
経済地理学年報	経済地理学会
歴史地理学	歴史地理学会
地理科学	地理科学学会 (旧: 広島地理学会)
GIS—理論と応用	(一社) 地理情報システム学会
都市地理学	日本都市地理学会
地理空間	地理空間学会

注) 学会設立年度順に示した。

上記の12雑誌について、CiNiiやJ-stageを通じて、三遠南信地域における各市町村名や地域名、地名などのキーワード検索により収集し、データベースを作成した。収集データ項目は、(1)タイトル、(2)執筆者、(3)発行年、(4)巻号・ページ数、(5)要旨（アブストラクト）、である。検索の結果、111の論文が分析対象となった。

また分析視点として、①論文の扱っているテーマ、地域、発行年代の特徴およびその関係性の明示、②論文要旨のテキストマイニング、の2点を設定した。なお②の分析にあたっては、(和文)要旨が示されている54論文を対象とした。

### 3. 結果

#### (1) 論文の扱っているテーマ、地域、発行年代の特徴、関係性

##### ①テーマ

地理学は一般的に自然分野と人文分野に分けられるが、その比率は自然：人文＝約1：3となった。詳細に見ると、自然系は地形を扱ったものが多く、3/4を占めていた。一方、人文系に目を向けると最も多いのが「農業」「農村」であり、人文系のなかでは約1/3であった。その次は「製造業」、「村落」、「防災・災害」、「商業」、「文化」と続いている。なお、三遠南信地域の特徴を示す研究テーマは、表2のようなものが挙げられる。

表2 三遠南信地域の特徴を示す研究テーマ

農業・農村：大葉、茶、ミカン、干し柿、キク、烏畑、集落営農
製造業：電子部品工業、金属機械工業、織物業、楽器工業、水引製造業、別珍・コール天、二輪車工業
防災・災害：豊川、龍山村、天竜川、浜松市沿岸地域
文化：サッカー、花祭り、神様王国、奉納煙火、昆虫食
エスニシティ：ブラジル人
その他：新幹線

##### ②対象地域

「三遠南信」という区分でみると、遠州地域が最も多く、続いて南信、東三河の順番となっていた。別の地域区分でみると、「奥三河」や「遠山郷」、「伊那谷」「伊那盆地」、「飯田盆地」などが挙げられた。流域、沿岸域という地域区分では、「天竜川流域」、「渥美半島」、「豊川流域」などがみられ、「浜松都市圏」という地域区分もみられた。なお市町村単位では浜松市が最も多く、田原市、豊橋市、伊那市、と続いていた。

##### ③地域とテーマとの関係

東三河、遠州、南信、いずれの地域でも最も多いのは「農業」「農村」であり、特に東三河を対象とした研究の場合は半分近くを占めていた。一方テーマ別に見ると、「農業」「農村」、「地形」についてはそれほど地域の偏りはみられなかった。「製造業」については遠州地域が半数を占めており、「村落」の場合は南信地域が半数を占めていた。その他、地域の偏りが大きいテーマは「災害・防災」、「商業」、そして

「エスニシティ」であった。

##### ④テーマと年代の関係

特徴として、「製造業」が1960年代以降に行われていること、「災害・防災」、「エスニシティ」、そして「環境」に関するテーマが2000年代以降に行われていること、の2点が明らかとなった。

#### (2) 論文要旨のテキストマイニング

テキストマイニングにあたっては、Tiny Text Minerを用いて形態素解析を行った。その結果、名詞のみの単語総数については、4,071が抽出された。そのうち複数回出現かつ分析対象となりうる名詞は126単語で、延べ出現数は599となった。

##### ①テーマに関する頻出語

テーマに関する要旨頻出語について整理すると、最も多いのは「農家」に関するものであった。そして、「農村(地域)」、「堆積(物)」と「生活」、「住民」と「農業」と「段丘」、「エスニック」と「コミュニティ」と続いていた。これは、農業産出額の上位である田原市、豊橋市を有する日本有数の農業地域であることが考えられる。また、地形に関する用語も頻出であった。これは、天竜川や豊川により形成された地形の魅力が背景にあると言える。

##### ②地域に関する頻出語

最も多いのは「浜松」に関するものであった。そして、「天竜川」、「豊川」、「伊那市」、「伊那谷」、「豊橋」と続いていた。河川や流域といった語が出現したのが地理学の特徴の一つであるとも言える。また、行政地域、形式地域としての「伊那市」と、等質地域としての「伊那谷」がそれぞれ出てくるのが興味深い。

##### ③年代別にみた頻出語

1960～70年代、1980～90年代、そして2000年代以降の年代3区分でみると、1960～70年代では「河川」「段丘」「断層」など地形に関する語、1980～90年代では工業や産業に関する語、そして2000年代以降は「エスニック」「コミュニティ」など生活に類する語、そして「減少」という語が多くなっていた。「農業」「農村」「農家」など、農業・農村に関する単語は、3年代通じて頻繁に使われていた。なお、2000年代以降は「減少」という単語が頻出したが、これは、少子高齢化社会、市場縮小を反映しているものと考えられる。

##### ④地域別にみた頻出語

地域別についての特徴をみていくと、年代別ほどには際立った特徴は見られなかったが、そのなかで、

表3 地域政策学部設立趣意書の一部

(前略)…本学部が目指している「東海(地域)学」は、以上の観点に立って、先述したアクション・リサーチの実践を通じて政策の有効性を分析しそれを加除する形での確立を目指す。そして、その過程において、東海地域を設計する学として具現化したい。本学は、豊橋市に設置されていることから、教育と研究の両面にわたって東海地域と深い親交を保持してきた。また、三遠南信地域連携センターの研究プロジェクトをはじめ多くの研究と事業が社会的に高く評価されており、東海地域を地域政策の実験場として位置づけることを受け入れられる土壌を確保している。…(後略)

「段丘」「隆起」「断層」といった地形に関する語句は、予想に反して東三河地域に頻出していた。また、「農家」「農村」は遠州地域と南信地域に多い一方、「農業」「園芸」は東三河地域、そして「工業」は遠州地域で多いといった特徴もみられた。他には、「住民」「生活」に関しては遠州地域と南信地域、「エスニック」「外国人労働者」や「買い物」は遠州地域で出現するという傾向がみられた。

#### ⑤構文解析

本稿ではポジティブな語とネガティブな語との関係の結果について、単語同士の修飾と被修飾の関係、係受け関係を抽出した。その結果、「増加」「拡大」などのポジティブな語については、農業・農村、エスニシティが関係しており、「減少」「縮小」などのネガティブな語に関しては、人や生活、災害が関係していることが明らかとなった。

#### 4. まとめ

三遠南信地域を対象とした「地理学」分野における論文を収集し整理すると、第一次産業(農業)、第二次産業(製造業)、第三次産業(都市)、地形など、人文地理学、自然地理学、両方の分野にまたがって幅広い研究が行われていたことが明らかとなった。そして、エスニシティやコミュニティなど、近年より注目されている研究テーマについても蓄積があることが示された。

以上のことは、はじめに述べた「三遠南信地域が研究の事例地域として魅力的であること」の証左であると考えられる。事実、地域政策学部設立趣意書『「東海(地域)学」の拠点～東海地域を設計する学の具現化の必要性～』では、表3のように述べられている。

今後の課題として、まず挙げられるのがまちづくり実践への貢献である。すなわち、今回の「可視化」で明らかになった三遠南信を対象とした地理学の研究着眼や蓄積などを、市民活動にアウトリーチするということである。例えば、三遠南信オープンDBを活用したシビックパワーバトルや郷土教育、小学校や中学校での社会科教育における「副読本」などに対して、研究成果を提示・反映させることなどが挙げられよう。特に、早ければ2022年度に設立(再編)されると報道されている高等学校「地域探求学科」における教材としての利用が可能ではないだろうか。

また、地理学分野における対象雑誌の拡大も必要である。愛知大学では文学部地理学専攻、総合郷土研究所、中部地方産業研究所など、研究機関による多数の

研究蓄積がある。他大学に目を向ければ、愛知教育大による『地理学報告』では豊橋市を対象とした研究が多数みられる。さらには地理学分野以外の学問分野(都市工学・建築学、社会学・民俗学など)における研究蓄積、そしてデータベースの公表(オープンデータ化)なども必要であろう。

#### 付記

本研究で作成した文献リストは、以下のURL/QRコードからアクセス・閲覧が可能である。

<https://bit.ly/2ODWv1V>

